



県人口190万人割れ

上半期にも、35年ぶり

昨年12月1日現在の県人口は190万6931人で、前年同月に比べて1万2728人(0・66%)減少したことが11日までに、県の毎月人口推計で分かった。ここ数年は年間1万人超のペースで減り続けており、今年中の190万人割れは確実な状況だ。新型コロナウイルス禍による地方回帰の流れで転入者は微増しているが、それを上回る速度で少子高齢化が進み、人口減に歯止めがかかっていない。

(田崎智亮)

急速な少子化背景に

190万人を下回れば、1988年5月(189万9127人)以来、35年ぶりとなる。 同推計によると、県人口のピークは2005年12月の201万7664人。以降は緩やかに減少し、11年	ようになり、直近では約1万3千人減のペースで推移する。進学や就職と重なる4月は例年、転出増で県人口は前月比で3〜4千人減るため、早ければ今年前半にも190万人を割る可能性もある。	連続でプラス傾向に。テレワークの浸透などを追い風に、県や市町が移住促進策に力を入れていることも奏功しているとみられる。国外からの外国人の転入も増加傾向となっている。 一方、自然動態(出生か
---	--	--

11月に200万人を割った。

19年に入ると前年同月比の減少幅が1万人を上回り、22年5月以降は8カ月

コロナ禍以降、本県の社会動態（転入から転出を差し引いた数）は改善しており、22年は毎月の出生数が死亡数の半数に達

99年10月以降はマイナスが続いている。22年は毎月の出生数が死亡数の半数に達



149

高校生向け
年組

たない傾向が続く。

高齡化や過疎化が進む地域は出生減が著しく、茂木町では22年10月、塩谷町で

育てることが出来る環境づくり、雇用の場の確保などに取り組んでいきたい」としている。

万人を初めて割り込んだ。
コロナ禍前の19年時点で
県は、県人口は60年に約
30万人に減少すると予
測。出生率や社会動態を改
善させて150万人以上を
維持する目標を掲げてい
る。

福田富一知事は「地域の活力を維持していくためには人口構成を確保していくことが重要。県のとちぎ創生15（いちじ）戦略に基づき、安心して子どもを生み

問 設

【1】「社会動態」とはどのような数を言いますか。
本文から抜き出して答えてください。

【2】「自然動態」とはどのような数を言いますか。
本文から抜き出して答えてください。

【3】記事に照らして、栃木県人口について正誤を○
×で答えてください。

- ①2023年1月1日現在、栃木県の人口は190万人を下回っている
- ②これまで栃木県の人口は200万人を超えたことがない
- ③2022年の栃木県は人口も社会動態も一貫して減少している
- ④2010年以降の栃木県は自然動態が一貫してマイナスが続いている

【4】記事に照らして、少子化や人口減について正誤を○×で答えてください。

- ①2022年12月の県人口は、2021年12月に比べて1万人以上少ない
- ②栃木県の人口は1990年以降に初めて190万人を超えた
- ③2019年以降、人口の減少幅が1万人を上回るようになった
- ④例年、転出は年末年始が最も多い

【5】本県の「とちぎ創生15（いちご）」戦略では、第2期計画として「まち・ひと・仕事創生総合戦略」で基本目標1～4が示されました。栃木県の人口減や少子高齢化を改善するために、下記の基本目標1～4から一つまたは複数選んで、具体策を100字程度で自由に論じてください。スマートフォンなどでとちぎ創生15戦略（第2期ダイジェスト版）を参考にしても構いません。

- ・基本目標1 とちぎに魅力あるしごとをつくる
- ・基本目標2 とちぎへの新しいひとの流れをつくる
- ・基本目標3 とちぎで結婚・妊娠・出産・子育ての希望をかなえる、誰もが活躍できる地域社会をつくる
- ・基本目標4 とちぎに安心して住み続けたい地域をつくる

参考：栃木県ホームページ 栃木県版第2期「まち・ひと・しごと創生総合戦略」とちぎ創生15戦略 (https://www.pref.tochigi.lg.jp/a01/senryaku/documents/15senryaku2ki_gaiyou.pdf)

